

後期ウィトゲンシュタインを

統一的に理解する試み

——「言語ゲーム一元論」の視点から——

黒 崎 宏

ウィトゲンシュタインを哲学史の流れの中に置いてみると、彼の前期の哲学『論理的・哲学的論考』(Tractatus Logico-Philosophicus; 略して『論考』)は、カントの『純粹理性批判』の流れの中に一番よく収まる。それは、批判哲学であり、且つ超越論的觀念論の枠内にあるのであって、或る意味では、『純粹理性批判』の最も純粋な現代版である、と言えるであろう。もっともウィトゲンシュタインは、『論考』において、カントが『純粹理性批判』において認識主観の側に帰属させた「形式」なるものを、論理形式として世界の側に帰属させた。その意味では『論考』は、限りなく実在論に近いのであるが。そして、『青色本』(The Blue Book)から始まり『哲学的探求』(Philosophische Untersuchungen; 略して『探求』)を経て『確実性について』(Über Gewißheit; 略して『確実性』)に至る彼の後期の哲学は、『論考』からの「言語論的離陸」として、位置づけられると思う*。それは、バーグマン(G. Bergmann)やローティ(R. Rorty)が言うところの「言語論的転回」**とは、全く異質なものである。

*黒崎宏「ウィトゲンシュタインとカント」、牧野英二・中島義道・大橋容一郎編『カント——現代思想としての批判哲学——』状況出版(1994)所収、を参照。

**渡辺二郎『現代哲学——英米哲学研究——』日本放送出版協会(1991)から、少し引用してみよう：

バーグマンは、「世界について語る」ことは、それを表現する「適切な言語について語る」ことと同じだと見る考え方が、「言語論的転回」のことなのだと述べている。(50頁)(波線~~~~は黒崎による。以下同じ。)

論拠の提示による同意の達成という形で、科学と類似の学理的体裁を持つ哲学に、旧来の哲学を変更させたいという根本動機から「言語論的転回」は出発しているとローティは見ている。(50頁)

パーガマンは、言語表現に注意を向け、これをできるだけ完備した理想形態へともたらし、不必要な哲学的議論や曖昧模糊とした概念が作動しないように努め、こうしてまさに「言語論的転回」の必要を哲学において主張した哲学者と目されることになるわけである。(55頁)

『論考』では、先ず、事態の集合としての世界があり、次に、それに対し、それと同じ論理形式を有する思念の集合があり、最後に、その様な思念の外在化としての、命題の集合がある。『論考』という著作は、世界を基にして、そこに同じ論理形式を有する〈世界・思念・言語〉の三層構造という形而上学を、主張したのである*。

*この主張は、『探求』においては、こう言われている：「思考と言語は、今や我々には、世界に対する比類の無い対応物である像として、現われて来る。そして命題、言語、思考、世界、といった概念は、列をなして順に並んでおり、それらは相互に等価なのである。」(『探求』第96節)しかし、勿論、このような主張は錯覚である。ステーテン(Henry Staten)は、彼の著 *Wittgenstein and Derrida*, University of Nebraska Press(1984) (ヘンリー・ステーテン著、高橋哲哉訳『ウィットゲンシュタインとデリダ』産業図書、1987)において、こう言っている：「この等価性は、ロゴス(言語表現、特に「本質の定式」)と、ノエシス(思考)と、そしてウーシア(存在者)の間の、アリストテレス以来の等価関係の一変形である。」(11頁)即ちステーテンは、皮肉にも、ここにアリストテレスに発する形而上学の一つの形——最も純粋な形——を見ているのである。もっともこの等価性は、アリストテレスに発する形而上学では「語り得るもの」とされてきたが、前期のウィットゲンシュタインでは「語り得ぬもの」とされており、最終的にはそれについては口をつぐむべきもの——沈黙すべきもの——なのであるが。

そして、このアリストテレス的形而上学——三層構造の形而上学——を自己批判し、そこから脱却して、〈言語ゲームの一元論〉を展開したのが、彼の後期の哲学である。それは、言語ゲームを所与と見なし、全てをそこに於いて見ようとする世界観である*。

*ウィットゲンシュタインは、こう言っている：「言語ゲームはいわば予見不可能なものであるという事を、君は心に留めておかねばならない。私の言わんとする所は、こうである。それには根拠が無い。それは理性的ではない(また非理性的でもない)。それはそこにある。——我々の生活と同様に。

(Es steht da—wie unser Leben.)」(『確実性』第559節)

「言語ゲームの根底になっているのは或る種の視覚ではなく、我々の営む行為こそそれなのである。」(『確実性』第204節)

「…安んじてこう書く。『始めに業ありき。』(ゲーテ『ファウスト』)」
(『確実性』第402節)

世界とは、〈物の世界〉でも〈事の世界〉でもなく、〈言語ゲームの世界〉なのであり、そこに於いて言語ゲームが成り立つ世界として、既に〈意味の世界〉であり〈価値の世界〉であり〈行為の世界〉なのである。世界とは、初めから、言語と織り合わされて現前しているものであり、言語に先立つ世界、といったものは、一切存在しないのである。全ては言語と共にある、というわけである。そして我々は、その様な世界——言語ゲームの世界——から、寸毫たりとも離れることが出来ないのである。ウィトゲンシュタインが後期に於いて到達したこの様な自覚を、私は「言語論的離陸」と言ったのである。したがってそれは、より正しくは「言語ゲーム論的離陸」と言うべきであろう*。(末尾の注1を参照。)

*私が、よく言われる「言語論的転回」という語を使わず、あえて「言語論的離陸」ないしは「言語ゲーム論的離陸」という語を用いたのには、色々な理由がある。

(1) 「言語論的転回(linguistic turn)」という語には、バーグマン以来の思想が染み着いており、それは全く非ウィトゲンシュタイン的である。この事は、さきの引用の波線箇所を見れば、明かであろう。

(2) 「転回」というと、未だその前後がつながっている、というイメージがあるが、「離陸」といえは、その前後が切れている、というイメージがある。そして私は、後者のイメージの方が適していると思う。

例えば、『論考』では、命題の本質は〈思念〉である；それを構成している実質が何であるかはともかくとして、とにかく事態と同じ論理形式を有する或るもの、としての〈思念〉である。ところが、『探求』では、こう言われるのである：「我々は、言語の時間-空間的現象について、語るものであり；非時間的-非空間的な怪しげなものについて、語るのではない。」(第108節) 言語観に於けるこの格差は、連続と言うよりは、非連続というに値しよう。

『論考』では、命題は唯一の形式 $[\bar{p}, \bar{\epsilon}, N(\bar{\epsilon})]$ ——これは「事態はシカジカである」という事を意味している——を命題の一般形式として有

しているのである（命題6および4.5）が、『探求』では、言語ゲームの多様性が強調される。したがって『論考』から『探求』への移行は、一から多への移行であり、これは、或る意味では、無限大の飛躍である。多から一への移行は連続しているが、一から多への移行は非連続であるから、である。ワイトゲンシュタイン自身この点に関し、こう言っている：「言語が有する道具とその使用法の多様性、即ち、語の種類と文の種類が多様性、を、論理学者たちが言語の構造について言ってきた事と比較する事は、興味ある事である。（そして、『論考』の著者が言語の構造について言ってきた事と比較する事もまた、興味ある事である。）」（『探求』第23節）なお、 $[\bar{P}, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$ については、山本信・黒崎宏編『ワイトゲンシュタイン小事典』大修館書店（1987）198—200頁を参照。この一から多への移行は、コペルニクスが行なった円軌道から楕円軌道への移行と同じ革命的移行なのである。

このような「言語ゲームの一元論」は、全てを言語ゲームの世界に於いて見るのであり、「言語ゲームの世界」こそ、全てのものに意味を与える〈場〉なのである。そしてこの事は、言語ゲームを離れた〈もの〉には意味が無い、という事を物語っている。ところが人は、えてして言語ゲームから離れて議論をする。そして、哲学的問題に苦しむ。そこでワイトゲンシュタインは、こう言うのである：「哲学の全雲塊は、一滴の言語〔ゲーム〕論（Sprachlehre）*へと凝縮する。（Eine ganze Wolke von Philosophie kondensiert zu einem Tröpfchen Sprachlehre.）」（p. 222 c）議論をそれ本来の故郷である言語ゲームに戻せば、哲学の全問題は消え失せ、一滴の言語〔ゲーム〕論が残る、というわけである。ワイトゲンシュタインが展開した「私的言語論」は、その一例である。

*英訳では Sprachlehre を grammar（文法）と訳しているが、これは適切ではないであろう。

さて、そうであるとすれば、〈語〉というものは、言語ゲームに於いて用いられて、初めてその意味を獲得するのであり、したがって、〈語〉の意味を理解しようとするならば、その語が言語ゲームに於いて用いられる有様——生きる有様——を見るべきなのである。そして、その結果出て来るのが「家族的類似性」の発見であり、アリストテレス以来の「内包・外延の概念論」の否定である。そしてこれは同時に「現代論理」の

否定であり、更にはザデー (L. A. Zadeh) の言う「ファジー論理」の否定なのである*。

*黒崎宏「現実の論理——特にその非形式性について——」科学基礎論研究、第五十一号 (1978) 11-13頁。

また、例えば、「認識主体」あるいは「行為主体」という語の意味として、——自我といった——何らかの対象を求めることは否定され、唯ひたすら「私」という語の言語ゲームに於ける使用を展望することが、求められる*。かくして、彼の「無主体説」が生まれる。

*ウィトゲンシュタインは、こう言っている：

「本質は文法に於いて表現される。」(『探求』第371節)

「或るものが如何なる種類の対象であるか、という事は、文法が語っている。(文法としての神学)」(『探求』第373節)

更に、似た事が、感覚や感情、或いは、信念・知識・理解・思考……といった精神的な事柄についても、言える*。これらの語が有意味に使用されるからといって、その意味として、何らの〈心的対象〉とか〈心の状態〉とかが在る訳ではないのである。これは、「心の因果説」の否定につながる。(「心の因果説」については、D. M. Armstrong & Norman Malcolm, *Consciousness & Causality*, Basil Blackwell, 1984; D. M. アームストロング, N. マルカム著、黒崎宏訳『意識と因果性』産業図書、1986、120頁以降を参照。)

*例えば、こうなのである：「考える」という語の意味を明らかにしようとして、我々は、考えながら我々自身の内面を眺める。そして、思う：我々がそこに見出すものが、「考える」という語の意味であろう！——しかし、「考える」という概念は、当にそのように、我々自身の内面を眺めればそこにその意味が見出せるようには、用いられていない。(『探求』第316節)

「心の因果説」の否定につながるもう一つの話題は、「規則は行為の仕方決定出来ない」という「ウィトゲンシュタインのパラドックス」である。確かに、我々の行為の或るものは「規則に従っている」と言われ、或るものは「規則に従っていない」と言われる。しかしその意味で——それ以外に何が意味できよう——規則に従っている行為は、必ずしも、当の規則を一度念頭に思い浮かべてからそれに従った行為であるわけではない。何故なら、規則を一度念頭に思い浮かべてしまうと、我々はその規則に従うべきか否かという問題が新たに生じ、当の行為に行き着けないから。したがって〈規則〉というものは、本来実は思い浮かべる必

要はないのであり、それ故、〈行為〉というものは、規則を思い浮かべる事なしに、当に行なわれるものなのである。それ故、「規則を思い浮かべる」という〈心的事象〉と〈規則に従う行為が行なわれる〉という事の間には、因果的關係は有り得ない。そして、これは再び「心の因果説」の否定につながるのである。

〈事象そのもの〉の独立存在を否定するこの様な思想においては、彼の前期の哲学『論考』が否定されるのみならず、プラトン・アリストテレス以来の、伝統的な西欧哲学そのものまでも否定される。そこに於いては、いわゆる「存在論」と「認識論」が、その出番を失ってしまう。即ち、それらは無意味な存在になってしまうのである。この事が有する意味は非常に大きい、と言わねばならない。

要するに、前期のウィトゲンシュタインによって、西欧哲学の骨格部分（形而上学）が、純粋な結晶として取り出され、後期のウィトゲンシュタインによって、その同じ西欧哲学が、実は幻影であったとして、消し去られたのである*。

*ウィトゲンシュタインは、こう言っている：「我々の考察は、その重要性を一体どこから得ているのか。何故なら、我々の考察は、ただ興味ある全ての事を、即ち、偉大にして重要な事 [——これは、「知識」・「存在」・「対象」・「私」・「命題」・「名前」……という語の形而上学的使用の事である、とみなせる（『探求』第116節を参照）——] の全てを、破壊しているように見えるから。（言わば、あらゆる構造物を、ただ瓦礫と塵芥のみを残して、破壊しているように見えるから。）しかし、我々が破壊しているものは、単なる幻影なのである。我々は、幻影を破壊する事によって、幻影に占領されていた言語の地盤（言語ゲームの世界）を、露にしているのである。」（『探求』第118節）

同種の作業をしている哲学者にデリダ（J. Derrida）がいる。ステータンは前掲書（『ウィトゲンシュタインとデリダ』）に於いて、こう言っている：「『青色本』以後のウィトゲンシュタインは、一貫した脱構築的見方を確立したという点で、デリダの先行者たちのなかで唯一無二の存在なのである。」（2頁）（末尾の注2を参照。）

ウィトゲンシュタインは、若い頃は論理実証主義者とみなされ、次には日常言語の分析哲学者とみなされ、その後トゥールミンによって、世紀末

ウィーンの文化を体現した人生論の哲学者であるとみなされた。(A. Janik and S. Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, Simon and Schuster, 1973 ; S. トゥールミン/A. ジャニック著・藤村龍雄訳『ウィトゲンシュタインのウィーン』TBS ブリタニカ, 新装版1992, 24-26頁その他, を参照。)しかし今や後期のウィトゲンシュタインはステーターンによって、脱構築の哲学者であると見なされるようになったのである。とはいえその兆しは、既に前期の主著『論考』にあったのであるが、「語り得ぬもの」の思想が、それである。(ウィトゲンシュタインを日常言語の分析哲学者とみなす事が誤りである事は、明かである。彼は日常言語を、「分析」するよりは、「展望」しようとしているのであるから。『探求』第90-92節および第122, 125, 132節を参照。)

ウィトゲンシュタインは、これらの事を、決してあからさまに語ってはいない。しかし我々はこれらの事を、彼の諸著作を通して、真剣に読み取らねばならない。

以上に於いて我々は、ウィトゲンシュタインの哲学を、西欧哲学との関係に於いて見てきたわけである。そして、そこに流れていた基調は、ウィトゲンシュタインの後期の哲学は西欧哲学に対して非常に否定的である、という事であった。ここで眼を東洋に転じると、我々は、仏教とくに禅仏教の中に、ウィトゲンシュタイン的言説を多く見ることが出来る。

一例を挙げれば、日本に於ける曹洞宗の開祖道元(1200-1253)は『典座(テンゾ)教訓』において、こう言っている：「如何なるか是れ弁道。」(仏道に力を尽くすとは、どういう事ですか。)座(ゾ)云く、「徧界曾て蔵ず(ヘンカイカツテカクサズ)。(あまねく世界には、かつて隠されたものではありません。)これは全くウィトゲンシュタイン的世界観である*。なお「典座」とは、修行僧の食事を司る役職のことである。

*『探求』に於いて、ウィトゲンシュタインはこう言っている：「如何にして文は、表現するという事を行なうのか?——君はそんな事を知らないのか? 何も隠されてはいないのだ。(Es ist ja nichts verborgen. ; Nothing is hidden.)」(第435節)即ち、例えば文の働きは、むき出しにそこに在るのであって、何らかのメカニズムが何処かに隠されている訳ではないのである。「何も隠されてはいない」というこの論点は、後にマルカムによって、

Nothing is hidden, Basil Blackwell (1986) という彼の著書に於いて、論じられた。彼は「日本語版への序文」に於いて、こう言っている：「信念についての以上の諸例に対しては、二つの異なった態度をとることが可能である。一つの態度は、それらの諸例に見出される多様さに挫折感を抱くものである。そして、次のように言う。「それゆえ我々は、信念の真の本性を未だ発見していないのだ。それは、それらの差異の中に隠されているあるものに違いない。」他の態度は、次のよう言う。「信念」という語は単一の意味を有している、という仮説は、正当化されない。我々はそれを捜し、しかし、発見しなかったのである。——何故なら、それは存在しないのであるから。何も隠されてはいない、のである。」(ノーマン・マルカム著、黒崎宏訳『何も隠されてはいない』産業図書、1991) この様な「本質主義の否定」こそ、プラトンのイデア論的思考からの離脱であり、後期ウィトゲンシュタインの哲学の基本的態度である。なお、その他の例については、黒崎宏『ウィトゲンシュタインと禅』哲学書房 (1987) を参照。

私は、ウィトゲンシュタインの後期の哲学を、「言語ゲームの一元論」という視点から、統一的に理解しようと試みた訳である。そこで問題になるのが、そもそも「言語ゲーム」というものを如何に理解すべきか、という事である。そして、この場面で出て来るのが、彼が『確実性』で論じた「世界像」である。「言語ゲームの世界」の底にあり、言われてみれば当然な事なのであるが、余りにも当たり前であるために、気づかれないでいる様々な事——「世界像」——である。かくして、この「世界像」を如何に理解すべきか、という事が問題になる。今日この問題は、はからずも人工知能研究者の間で「フレーム問題」という形で、論じられている*。後期のウィトゲンシュタインの哲学がこの問題に対し何らかの寄与が出来れば、幸いである。

*「フレーム問題」とは何か、という事を簡単に述べることは困難であるが、その一つの言い方は、こうである：「なんらかの行為をするときに、その行為の前提となる条件ならびにその行為の影響が及ぶ範囲を限定するにはどうすればよいか」(マッカーシー、ヘイズ、松原仁著、三浦謙訳『人工知能になぜ哲学が必要か——フレーム問題の発端と展開——』哲学書房、1990、195頁) 例えば、私が友人と或る場所で落ち合う約束をするとき、その「約束」という行為には、キャンセルの条件が前提されているはずである。それは、例えばこうである：「シカゴの大地震が起きたとき、

「シカジカの大雪が降ったとき」, 「シカジカの交通事故があったとき」, 「シカジカの病気になったとき」, 「ライオンが動物園からシカジカの方面に逃げたとき」, 「シカジカの場所に毒ガスが発生したとき」, 「シカジカの戦争が勃発したとき」, …そして、この条件は無限に続く。もちろん我々は、友人と約束するとき、これらのキャンセル条件（これらは、「でないならば」という〈アンレス（unless）条項〉でもある）をいちいち確認はしない。それらは、当然の了解事項として、初めから前提されているのである。ところが、我々と同じ事をする人工知能を作ろうとすれば、これらのキャンセル条件を全てエクスプリシットに書き出さなくてはならない。そうしないと、我々と同じ事をするプログラムが書けないからである。これが「フレーム問題」である。しかし、これは不可能である。エキスパートシステムのように特定の仕事をする人工知能ではなく、人間のように種々雑多なことを際限なくする人工知能におけるフレーム問題は、解決不可能なのである。（黒崎政男『ミネルヴァのふくろうは世紀末を飛ぶ』弘文堂、1991、3章、5章を参照。）

注1：ときどき、「言語ゲーム（Sprachspiel）」という概念には二つの誤解がある。一つは、「言語ゲーム」という概念は原始的な言語使用について言われるのである、という誤解であり、他の一つは、「言語ゲーム」という概念は「方法概念」である、という誤解である。そこで、これらの誤解を払拭するために、『探求』第I部から、「言語ゲーム」にかかわる部分をいくらか引用しておこう。

7. 我々は、第2節の使用の全過程が、子供がその母国語を憶え込むための諸ゲームの一つである、と考える事も出来る。私はそれらのゲームを「言語ゲーム」と名づけようと思う。そしてまた私は、原始的（primitiv）な言語使用についても、しばしば言語ゲームとして語るであろう。私はまた、言語とそれが織り込まれる行為の全体をも「言語ゲーム」と呼ぶであろう。

23. 「言語ゲーム」という語は、ここに於いては、言葉を話すという事は人間の活動の一部である、或いは、生活の形式の一部である、という事を際立たせるためのものなのである。

130. 我々の明快で単純な言語ゲーム（unsere klaren und einfachen Sprachspiele）は、言語を将来規則するための予備的研究——言わば、摩

擦と空気抵抗を無視した第一近似——ではない。むしろ、そのような言語ゲームは、ここでは——類似性と非類似性を通して我々の言語の様子に光を投げかけるべき——比較の対象としてあるのである。

249. 嘘をつく、という事は一つの言語ゲームである。

630. (a)或る人が或る他の人に、或る特定の手の運動をするように、或いは、或る特定の姿勢をとるように、命令する。(b)或る人が、或る規則的な現象を——例えば、種々の金属の酸に対する反応を——観察し、そしてそれに基づいて、或る特定の場合に生じるであろう反応について、予測する。これら(a)(b)二つの言語ゲームの間には、…

654. 我々の誤りは、我々が事実を「原現象 (Urphänomene)」として見なくてはならないところで、即ち、我々が、かかる言語ゲームが行なわれている、と言うべきところで、説明を求めるという事である。

656. 言語ゲームを、原初的なもの (das Primäre) として、見よ。

確かに、7 だけ見れば、「言語ゲーム」という概念は原始的な言語使用について言われるのである、と言いたくなるであろう。そしてまた、130 だけ見れば、「言語ゲーム」という概念は「方法概念」である、と言いたくなるであろう。しかし、これらの見解が誤解であるという事は、それ以外の引用を見れば、明かではなからうか。「言語ゲーム」という概念は、言語使用という現象を記述する最も基本的な「記述概念」なのである。なお130は、「明快で単純な言語ゲーム」について言われているのであって、言語ゲーム一般についてではない、ということに注意してほしい。

注2：ステータンが「『青色本』以後のウィトゲンシュタインは、一貫した脱構築的見方を確立したという点で、……」と言うとき、彼は一体何を意味していたのか。この問いに明確に答えることは、非常に重要であるが、しかし同時に、非常に困難である。第一、デリダの言う「脱構築 (ディコンストラクション；déconstruction)」という事が、非常に分かりにくい。しかし我々は、この点を避けて通るべきではあるまい。そこで私は、次善の策として、ステータンが何を意味していたかはともかく、ステータンの言葉が当てはまると思われる事例を、『青色本』以後のウィトゲンシュタインの中から、繰り返しをいとわずに、アットランダムにピックアップすることにする。それは、『青色本』以後のウィトゲンシュタイン——即ち、後期のウィトゲンシュタイン——の哲学を「脱構築的」と呼ぶとすれば、それはこういう事にでもなろうか、という事である。

「家族的類似」という考えは、プラトンのイデア論とアリストテレス以来の古典的概念論の〈脱構築〉である。（『概念と言葉』拙著『科学と人間』勁草書房、1977、所収、参照。）

「語の意味はその使用である」という考えは、意味として何らかの対象を捜す伝統的意味論の〈脱構築〉である。（『ウイトゲンシュタインの意味論』拙著『語り得ぬもの』に向かって』勁草書房、1991、所収、参照。）

「ウイトゲンシュタインのパラドックス」は、伝統的行為論の〈脱構築〉である。（『クリプキの『探求』解釈とウイトゲンシュタインの世界』拙著『科学の誘惑に抗して』勁草書房、1987、所収、参照。）

「ウイトゲンシュタインの深層文法」は、チョムスキー的言語観の〈脱構築〉である。（いずれ論じる機会があるであろう。）

「ウイトゲンシュタインの無主体説」は、西欧的自我論の〈脱構築〉である。（『ウイトゲンシュタインにおける自我の消滅』拙著『科学の誘惑に抗して』所収、参照。）

「私的言語論」は、イギリス経験論の流れを汲む言語論の〈脱構築〉である。（特に論じるまでもないであろう。）

「規準に基づく他我論」は、伝統的他我論の〈脱構築〉である。（『他人の心』昭和63-平成2年度科学研究費補助金・総合研究A・『他我論再構築のための歴史的・存在論的研究』研究代表者柏原啓一・研究成果報告書、1991、所収、参照。）

「純粋な持続を有しない心的事柄についての考察」は、純粋な持続を有しない心的事柄の實在論の〈脱構築〉である。（『後期ウイトゲンシュタインの核心』工藤喜作他編『哲学思索と現実の世界』創文社、1994、所収、参照。）

「かぶと虫の比喩」は、純粋な持続を有する心的事柄の實在論の〈脱構築〉である。（『後期ウイトゲンシュタインに何を学ぶか』成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』第13集、1994、所収、参照。）

「パラダイム論」は、公理主義・形式主義の〈脱構築〉である。（『パラダイム論』の必然性、拙著『科学の誘惑に抗して』所収、参照。）

「導管の比喩」あるいは「河床の比喩」は、ヨーロッパ哲学に伝統的な基礎の探求の〈脱構築〉である*。（いずれ論じる機会があるであろう。）

*ウイトゲンシュタインは言っている：「経験命題の形をしたいくつかの命題が凝固し、固まらずに流れる経験命題のための導管として、働く。この関係は時とともに変化するのであって、流動的な命題が凝固したり、固まっていた命題が流れだしたりする。」（『確実性』第

96節)；「神話（世界像の体系）が流動的な状態にもどり，思考の河床が移動するという事もありうる。しかし私は，河床を流れる水の動きと，河床そのものの移動とを区別する。両者を明確に区分することは出来ないが。」（『確実性』第97節）

等々等々

要するに後期のウィトゲンシュタインは〈脱構築的〉なのであり，或る意味では，もっと破壊的なのである。それはむしろ「ポスト脱構築的」と言われるべきかもしれない。たとえ年代的には溯ろうとも。

以上は平成6年度成城大学特別研究助成費による研究成果の一部である。